ブータン人の生活史の一断面
―生活と自己教育の結合―

前平　泰志
京都大学教育学研究科

はじめに

以下の記録は、1997年から1999年にかけて行った一連の研究調査のなかでブータンの人々に行なった聞き取り調査の記録をできるだけ忠実にテープから訳出したものである。筆者がこの全体的な研究調査で分担したのは、成人の教育活動の分析であり、ノンフォーマル教育の現場での聞き取り調査も含まれているとはいえ、全体から言えば、直接的な成人の教育活動のみを対象としているわけではない。その理由は、ブータンのような「開発途上」諸国にあっては、学校教育はもちろんのことノンフォーマル教育の中心をなす識字教育すら、生活総体からの学習に比べれば、相対的にその比重がはるかに軽いことが挙げられよう。もちろん近年ブータン政府が「第8次5ヵ年計画」に従って、学校教育や識字率の上昇のためにノンフォーマル教育に力を入れていることは、本報告書においても指摘されている。(杉本論文、吉田論文を参照のこと。) しかし、ブータンの圧倒的多数を占める地方の農民にとって、生涯にわたる自己形成活動は、組織された教育活動から無縁な地点からなされているのである。そのように考えると、教育や学習が明確に分離されない、というより、学習と生活が渾然一体となっているひとびとの日常の生活（＝暮らし）の中にどのように学習活動が統合されているかを知ることの課題の方がより重要と言えよう。そしてこのテーマこそは、生涯教育の課題であったはずである。

ブータンの近代国家への移行は、生活の中の学習の様式やスタイルをも徐々にではあるが、変容させていく。ブータン人のインフォーマル教育、とりわけ子育てを含む家族内の子どもへの教育的なまなざしの変容はその顕著な一例に過ぎない。制度的な教育についていえば、僧院学校から学校教育へと親の子どもへの期待が変わりつつある。民衆のまなざしが確実にシフトしつつあるのである。このことは聞き取り調査のなかでも明らかになっている事実である。学校は近代的な技能や知識を子どもたちに身に着けさせるだけでなく、深いところで子どものみならず、親を含む共同体の成員たちの人間観や幸福感（不幸観）を変えていくだろう。

さらに、エスニックな紛争の結果生じる個人の歴史は、生涯にわたって当事者たちの生活のプロジェ（「投企」）に大きな影響を与えることはいうまでもない。生活空間の移動は、フォーマル、ノンフォーマル、インフォーマルな学習空間や学習様式をも変えてしまう。難民キャンプで生活する人々にとって、自らの歴史を語ることは、良くも悪くもその集団の生活史を語ることと同じになってしまう。なぜ彼らが難民として故国を離れて異国の地で生活せざるを得なくなったか、何が彼らを駆り立てているのかについて耳をすますことは、ブータンの社会をもうひとつの別の角度から検討する際に必要な視座ではあるまいか。

従って本稿は、順次、以下のような3部の構成になっている。Ⅰは、ユースセンターという青少年施設を利用して、ゾンカ語の読み書き学習のためにノンフォーマル教育に通ってくる女性たち、Ⅱは、ブータンの大多数を構成する農民と道路工事に重視する労働者、Ⅲは、ネパールの難民キャンプで生活する活動家、に対するインタビューの記録である。Ⅲの活動家とは、英語で直接インタビューすることができたが、Ⅰ、Ⅱのブータンの一般の生活者との聞き取りは、ゾンカ語と英語の通訳を介して行なった。

もとより、この聞き取りの記録がブータンの一般大衆を遍く表象・再現(re-present)しているというつもりも、典型的なタイプを抽出したという自信も、ない。ブータンの一般の人々の声がわれわれのところに届くことは皆無に近い現状を考えるならば、この記録を公にすることは、何ほどかの意味はあるであろうと考えたからに他ならない。

Ⅰ　ノンフォーマル教育の教室で

———　（ユースセンターを管理運営しているセンター長に）このセンターに学びにくる生徒はすべて女性なのでしょうか？

答　ノンフォーマル教育は、農村では若い男性が学びに来ることがあるかも知れませんが、都市やお寺で行うクラスでは男性は少数です。なぜなら、男性は都市では，仕事を持っていますから。しかし、女性は、100パーセント、このクラスで文字を学習することに強い関心を持っています。彼女たちは仏教のお祈りをあげたいのです。彼女たちはお寺でお坊さんたちが素晴らしい声音でお経をあげていることを見て知っています。だけど彼女たちはそれができない。彼女たちはお祈りをしたいのです。お経を詠むことは彼女たちにとって素晴らしいことだということを知っているのです。だから、彼女たちは勤勉です。お経を詠めるようになるために必死なのです。今，ここでは，ふたりのインストラクター（教師）がいます。

ここで教えていることは、純粋な識字教育に限りません。同時に、菜園づくりのような技能を教えようとしています。それから歌唱や早期結婚の戒めのような道徳も教えています。早期結婚をするものはここブータンでは多いのですが、健康や衛生上の理由から好ましくありません。多くの農村部では電気もありません、火に頼らざるを得ません。衛生面も良くないのです。彼らは手も洗いませんし。そこで、インフォーマル教育として、食事の前、食事の後には手を洗えと言っています。従いまして、このようなノンフォーマル教育はいっぱいすることがあるのです。6ヶ月で、読み書きを含めてあらゆることを教えます。でも、彼女たちはゾンカ語よりも英語を学びたがっています。ブータンでは英語を誰もが話しますから。それで彼女たちも英語を学びたいのです。もし英語の学習が許可されれば、6ヶ月で学ばねばなりません。しかし終了時にもほとんど書けませんが。

———　ゾンカ語は6ヶ月で読み書きできるようになりますか？

答　うーん。毎日、二時間は学びますが。

———　一週間に何日くらい開講していますか。

答　5日です。ここでは状況が違っています。このセンターは政府の所管するものだからです。彼女たちの夫も外で働いています。彼女たちは外で働いて生計を維持しているのではありませんし、農地でもそれほど働いているわけではありません。だから、彼女たちは少し早く寺院にやって来ることができます。午後二時に来ることもできれば、午後4時に来ることもできます。

———　あなた自身も教えられていますか？

答　私は教師として出発しました。ついで小学校で校長を勤め、高校でも校長を勤め、それから文部省に入り、その後県庁の教育の責任者になるように依頼されました。私はこのノンフォーマルな教育の仕事に従事することを非常に気に入っています。

（その後、センター長が四人ばかりこの学級に通っている女性を集めてくれて、自由に聞き取りをさせてもらった。）

———　インタヴューを開始したいのですが。まずお名前と年齢を教えてください。

答　シノンです。16歳です。

答　チンペンです。30歳です。

答　ウィンチュデンです。20歳です。

———　どうしてゾンカ語を勉強したいと思うようになったのですか？

答　私はこの近郊に住んでいるのですが、ここセンターでゾンカ語を教えてくれることを知りました。私が勉強したいのは、ゾンカ語の読み書きですが、将来仏典が読めるようになりたいと思っています。文書を読んだり、手紙を書いたりすることができるようになれば素敵だと思っています。子どものころあまり勉強する機会がありませんでした。今基礎的な読み書きを勉強しているのはそのためです。

———　ここにおられる方々みんな結婚しているのですか？夫は何をしていますか？彼らは読み書きできるのでしょうか？

答　私は結婚していません。シノンは既婚者です。ウィンチュデンは既婚です。彼女は1人子どもがいます。彼女の夫は働いていません。彼は僧侶なのです。われわれはチョクと呼んでいます。彼女も既婚です。彼女の夫はブータンの南で訓練を受けています。

———　というと、単身の赴任ですね。

答　ええ。

———　彼女は計算できなかったのですか？

答 商品を買わなければならないとき、そのラベルや値段を読むことができませんでした。大変困ったことがあります。都会では読み書きを知らなければ大変危険です。

――― 昨日、私はクラスで「あまり早く結婚するな」と歌っているのを聞きました。彼女たちにそれはどんな意味を持っているのでしょうか？

答 若くして結婚すると、生活上の多くの困難が伴います。もし夫が働いていれば、生活の糧を得たり、子どもの世話をすることなどに苦労を若くして背負い込むことになります。実際には、夫は正規の仕事を持っていないことが多いのです。結婚が重荷であることを若い妻は気がつきます。彼女たちは西ブータンの出身です。彼らは方言をしゃべります。

答 ナムゲチュゾンといいます。8人家族です。5人子どもがいます。

答 既婚です。4人の子どもと母と父、合わせて8人家族です。

――― あなたも既婚ですか？

答 ええ、ふたり子どもがいます。

――― ゾンカ語を学び始めたのはいつからですか？

答 私たちが始めて4ヶ月になります。

――― クラスはいかがですか？楽しいですか？

答 大変楽しんでいます。

――― どうしてクラスに来ようと思ったのですか？

答 私は家ではほとんど時間がありません。ここでは読み書きできる時間があります。この勉強は大変役に立つと信じています。

――― あなたの夫はいかがですか？

答 私の夫は教育部門で働いています。

――― それで彼はあなたにこのクラスに行くように勧めたのですか？

答 私の夫はノンフォーマルな教育が始まったという情報を持っていました。それで彼は私にこのクラスに来て勉強するように勧めてくれました。私の子どもたちが大きくなって手が離れたので、やっと今ここに来て勉強ができるようになったのです。

――― あなたはどうですか？同じ質問ですが。

答 ノンフォーマル教育はここで始めました。私は大変ここに来るのが好きです。周りの人と話ができますし、ゾンカ語を読み書きできるようになるでしょう。そうすると仏典を読むことができます。このクラスは私にとって大変ためになります。今の生活にも、これからの生活にも。

――― このクラスの参加はあなた自身が決めたのですか？

答 ええ、自分で決めました。みんなが私を応援してくれます。

――― あなたはどうですか？どうしてこのクラスに参加するようになったのですか？ここに来るように決めたのはあなた自身ですか？

答 私は読み方を学びに来ています。仏典を読めるようになりたいのです。

――― 家族の人の配慮はどうだったのでしょうか？

答 夫から私にここに来るように薦められました。家族からも支持されています。

――― ゾンカ語を学ぶことによってどんなことが得られますか？

答 この社会の中で多くの精神的な重圧を感じています。子どもたちは英語を学んでいますが、自分たちは何もわかりません。夫も重圧を感じています。女性の学習は、子どもたちの進歩に追いつくこと、そして夫に追いつくことが目的だと思います。女性たちは何かを知らねばならないのです。手紙を書いたり、読んだりするときに誰かに頼まなければなりません。夫に「私は帰宅します」と手紙を書くときも同様です。誰かに書いてもらうのを頼まねばなりません。でも、本当に表現したいことを明確に表現することは出来ません。それが重圧になるのです。これが自分で読み書きを学びたいという理由です。私はたくさんの兄弟や姉妹がいます。以前には学習の機会がなかったのです。しかし今は学校外の教育があります。このセンターで学ぶことは大きな喜びです。

――― 兄弟姉妹は何人ですか？

答 九人家族です。兄弟二人、弟二人に姉妹二人です。

――― 弟はこの近辺にいます。私は東部の出身です。大変な僻地なのです。そのため私は弟と一緒にここで住んでいます。弟は学校で勉強することができなかったので、いろいろ問題がありました。それから英語やゾンカ語を話せる人を見つけたのです。

――― 毎日ここに来ていますか？

答　ええ。毎日。

――― ここに来たくないと思う日はありませんか？

答　このような勉強の機会が出来たことは大変喜ばしいことです。でも、何らかの理由で、あるいは休日には家にいなければなりません。そんなときには、時間を有効に利用していないのではないかと悲しくなるときがあります。毎日でもここに来たいのです。ここに来たくなくなるという事はありません。でも、1日や2日家にいなければならないときは、学習の進度に遅れるのではないかと心配です。ですから、毎日でもここに来たいのです。

――― クラスに来る以外にはどんなことをしていますか？

答　基本的にここの出席者のうち二人は主婦です。ここに来ないときには、家にいて料理をしたり、子どもの世話をしたりしています。独身者は買い物をしたりして時間をつぶします。

――― あなたにとって、これまでのうちで最も幸せなときはいつでしたか？

答　私は両親が学校に行かせてくれなかったので、そのことを後悔し悲しく思っていました。今は読み書きできるようになって幸せです。夫が私にゾンカ語をうまく読み書きできるようになれば、英語とゾンカ語の辞書をあげようと言ってくれています。英語も勉強するつもりです。そして英語の本も買って英語も習得したいです。

最大の幸福のときは、私が若かったときです。その後は子どもができたのでどこにも行くことが出来ませんでした。でも今は幸福です。子どもが成長しましたから。だからここに来る機会を得たのです。勿論、今後も多くの進歩をしていきたいと願っています。

答　私はネルヴァニャ出身です。夫はユースセンターで働いています。ここで働く機会を得たのです。私は家からユースセンターに来るときを大変嬉しく感じます。そして教室に出て読み書きができるなんて。私の喜びです。

――― では、反対に最も辛かったこと、辛かったときはありますか？

答　この近くに住んでいるのですが、ここに来れないときは辛いです。ここに来て授業に参加できるのは最大の喜びです。

答　子どもが小さかったときは大変だったのですが、今は子どもたちが成長して自由な時間が出来ました。幸せです。

――― 子どもたちは何人いますか。そしてその子たちはいくつですか？将来その子達に何を望みますか？

答　長男は12歳です。次男は9歳、3男は5歳と7ヶ月、一番下の子どもは二歳と3ヵ月です。4人の子どもです。

――― 子どもの将来に対して何を望みますか？

答　子どもの将来は両親の手にあると感じています。だから子どもたちには教育を授けたいのです。学校はこれからの子どもたちの人生に必要です。二人の子どもたちは学校に行かせています。将来、子どもたちが大きくなって、しっかりした立場を占めるようになれば、私の生活も平和で幸せになると思います。

――― 子どもの将来に対しては？

答　四人子どもがいますが、上の子どもは学校に通っています。生涯を通してうまくやっていってくれればと思います。それが私のこれからの最良の瞬間です。

答　二人子どもがいます。ひとりは7歳で、もう一人は5歳です。二人とも保育園に通っています。基本的には、教育を受けた子どもたちが社会に出てくれればよいと思っています。それだけです。

――― （独身の女性に向かって）このクラスの終了した後、結婚するつもりですか？

答　私は女性ですから、勿論結婚します。今すぐはちょっと早すぎますが。20歳になるまで待つつもりです。

――― 子どもは何人ぐらい欲しいと思いますか？

答　二人か、少なくとも二人は欲しいと思います。初期はバースコントロールはありませんでした。ブータンではあまり知られていません。4人か5人の子どもを持つことも出来たのでしょうが、子どもの数は2人か3人に制限したいのです。

――― ここにいる皆さん全員がバースコントロールをしているのですか？

答　私は息子が欲しかったので、コントロールはしませんでした。でも今は、息子がいます。夫も望んでいますので、バースコントロールをしてい

ます。

答 私は子どもが5人います。バースコントロールシステムに従っています。

――― もう子どもは望まないのですか？

答 ええ。もう欲しくありません。

――― 子どもの出産はどこで行われましたか？病院ですか、家ですか？

答 すべて病院です。私の母は産婆でした。彼女が家で取り上げてくれました。家での出産は危険を伴います。だから他の場合はすべて病院です。私は家で子どもを産みましたが、それは病院からの支援があったからです。

――― どうしてあなたは病院に行かなかったのですか？

答 私の家は一般病院から遠いところにあったので、病院から援助を受けられませんでした。

――― このセンターで学んだ一番大切なことは何でしたか？

答 環境と健康についてです。きれいな水を飲まなければならないことが分かりました。夫は家で新聞を読むのを習慣にしていましたが、私にはその機会が奪われていました。今は幸せです。

――― 他のひとは？

答 以前は村に住んでいました。その当時は健康の知識は限られていました。今は、このセンターに来て森林、健康、その他のことについて学ぶことが出来ました。

――― あなたはお祈りしますか？1日に何回くらいお祈りしますか？

答 朝1回、夕方1回です。先生がお祈りは本当に楽しいと教えてくれました。お祈りすることは楽しいです。今は皆で一緒にお祈りできる機会があります。家ではひとりでお祈りします。

Ⅱ 農村で

以下は、中部ブータン地域（ブムタン）において労働者や農民にアトランダムに行なったインタビューの記録である。

（1）道路工事の作業を行っていた労働者に。

――― あなたは何をしていますか？

答 私は公共土木部(Public Working Department)で働いています。私の家族もそうです。

――― あなたの家族は？

答 7人です。息子が三人、娘が二人、夫婦です。二人の娘は学校に通っています。

――― あなたの収入を伺ってもよいですか？

答 1ヶ月 1,500ヌルタムです。でも、食糧はもらえます。米，油、塩、野菜などです。

――― 食べていくには十分ですか？

答 それ以外にもお米がもらえますし、他にも特典があります。

――― なるほど。それで？

答 大家族なら、62キログラムの米が現物給付されます。独身で働いていないひとは、25キロです。家族のないもの，離婚した者、独身者で公共土木部に勤めている者は、1,500ヌルタムとともに25キロの米が給付されるのです。

――― この食糧は(P. W. D.）が供給したものですか？

答 ええ、そうです。家族全体としては、62キロになります。

――― 年間で給付されるのですか？

答 ひと月ごとの給付です。

――― 他に財産はありますか、家畜だとか？

答 いいえ。私たちにとって、生活は「計画」なのです。私たちは森で働くためにあちこちを転々とします。道路や森林のメンテナンスを職業とする人々は家を持っています。私たちはその家に住みます。5年か6年住むのです。森の仕事には二つのタイプがあります。今私たちは17ヶ月に住んでいます。10月には、この仕事は終わりです。別のところに移動します。
家ごと移動するのです。

――― お父さんはどんなお仕事をしていましたか？

答 父も母も農民です。私たちはチラムの出身です。

――― この職業を選んだ理由は何ですか？

答 私の家族は十分な土地を持っていませんでした。わずかな土地で、十分な食糧を供給することが出来ませんでした。そこでここに働きにやってきたのです。ここでは金を稼ぐことが出来て食糧も豊富だからです。

――― 学校教育についてはどうですか？あなたは学校に行きましたか？子どもたちはどうですか？

答　私は子どもたちを学校にやっています。息子はピダルビュスで働いています。

――　若い娘さんがいましたね。あの子達は学校に行っていないのですか？

答　息子の一人は21歳です。彼は高校に行っています。娘は9歳ですが彼女も学校に行っています。他の娘も15歳ですが、ＰＷＤで働いています。

――　あなた自身はどうですか？

答　行ったことはありません。

――　あなたにとって一年中で一番幸せなときはいつですか？

答　9月にお祭りがあります。それが一番楽しい。仏陀の誕生日です。ひとつは9月にもうひとつは10月にあります。新年を祝うイベントのようです。

――　仏教のお祝ですか？

答　ヒンズー教です。

――　あなたはヒンズー教徒ですか？

答　いいえ、仏教徒です。ネパール出身ですが。信仰する宗教は仏教ですが、ヒンズーのお祭りには参加します。

――　今までに一番楽しかったことは？

答　特別そんな日はなかったです。いつも変わりません。本当に幸せなのです。

――　反対に、最も不幸せなときは？

答　現在は、生活はあまり幸せではないです。というのは、家族を支えるだけの十分な土地を持っていませんので。だからＰＷＤで働いているわけですが。

（2）田畑で農作業をしていた婦人に

――　年齢を教えてください。

答　50歳です。

――　何を職業にしていますか？

答　農業です。

――　家庭の主婦ですか？

答　そうです。

――　家族は何人いますか？

答　6人です。夫と4人の子どもです。これが私の夫です。2エーカーの土地を持っています。

――　財産はありますか？

答　家畜を飼っています。5頭の雌牛です。

――　この土地から他所へ出かけたことがありますか？

答　お寺に行ったことがあります。

――　何回くらいですか？しょっちゅう行くのですか？

答　お寺へは豆を売りに行ったのです。チリを植える季節になると行きます。寺で売るためのチリの苗を買い出しに行くのです。

――　1日何をしていますか？

答　今、仕事が非常に忙しい時が始まっています。田畑を耕さねばなりませんし、菜園も作らねばなりません、チリや豆、その他の植物も植えなければなりません。今はたくさんの仕事があります。

――　学校には通ったことは？

答　一度も。でも子どもたちは学校に通わせています。

――　子どもの将来の生活について何か考えていますか？

答　大きな期待を持っています。子どもたちを学校に通わせてるのもこのためです。自分の休日でさえ、土曜日も半日学校があります。学校を卒業したら子どもたちがよりよい生活が出来るようにと願っています。私たちが歳を取ったら、子どもたちから援助を得ることが出来ますし。子どもたちが政府の仕事について、生計を得られるようになればと願っています。

――　子どもたちが親の土地で働くつもりがあると思いますか？

答　4人の子どもがいます。小さな子ども二人を学校に送っています。子どもたちはさっき言ったように公務員になって私らを助けてくれるでしょう。土地は他の子どもたちが護ってくれると思います。

――　人生で一番幸せだったときはいつですか？

答　人生で一番幸せだったときは特にありません。でも今は非常に幸せです。生活の糧を得る土地もありますし、十分な暮らしです。

――　最も不幸せなときはいつですか？

答　病気になったときです。そのときだけです。それ以外は何の心配事もありません。

――　病気のときはどうするのですか。

答　病院に行きます。

――　近代病院ですか？

答　ええ。ギウクと呼ぶ村の施設があります。そこは学校、病院、森林、農業の輸出、動物病院な

どすべて備わっています。病気になったときはそこに行きます。ビアチュウと呼んでいるのですが、「必要な基本的援助」ということです。ひとつの村にはひとつのギウクがあります。もしそこでうまくいかなければ別の病院に連れていきます。もしそこでうまく行かなければ寺の病院へ連れていきます。
それでも回復の見込みがなければ、家に帰って、宗教的儀式を行います。
――― 1日どのくらいお祈りするのですか？
答 年末に儀式があります。その期間は、本当にいろいろ仕事があります。飼った豚をいけにえに家の神に捧げます。たくさんのラマ僧を呼びます。そしてお祈りをしてもらいます。病気のときにはラマ僧に来てもらってお祈りをしてもらいます。祈祷が終わったら家の屋根のうえに幟をたてます。どの家も幟をたてます。毎年その幟を変えます。大きな儀式です。この儀式をしない人は幟を立てません。

（3）比較的裕福な農家で夫妻に

――― あなたも農民ですね。家族の数は何人ですか？
答 5人です。夫婦と子ども3人です。でも家には9人います。妻の親族です。妻は3人の子どもを持っています。ひとりは妻の母の妹、他の3人は彼女の兄弟と妹です。
――― 奥さんは学校に行ったことがありますか？
答 いいえ。
――― 子どもたちはどうですか？
答 子どもたちは学校に通っています。
――― 1日中奥さんは何をしていますか？
答 畑で働くのと家事をしています。息子の一人はプナハの高校に行っています。
――― 子どもの未来について何か考えていることがありますか？
答 ある計画を持っています。子どもたちは皆、学校に行かせたいと思っています。そして卒業後は高校に行き、出来れば大学にも行かしてやりたいと思います。子どもたちの人生は自分たちのような辛い目にあわないような生活を遅れるようにしてやれればよいなあと考えています。
――― 財産を持っていますか？
答 3エーカーの土地があります。野菜を作っています。それを市場に出しています。
――― 生活するには十分ですか？
答 十分です。
――― 他の町に行ったことがありますか？
答 お寺参りだけです。
――― 人生で最も幸せな時期はいつでしたか？反対に不幸せだと感じたときは？
答 家族の中で誰も病気にかからないとき、です。だから病気にかかったときは、不幸せです。
――― お祈りはしますか？
答 1年に一度、家族のための大きな儀式があります。神の恵みを祝うものです。
――― 子どものためのお祝いはないのですか？
答 宗教上の子どもの誕生を祝う祭典はありません。しかし、今日、都市では近代化されてきて子どもを祝う行事があります。子どもが誕生したとき、お寺に連れていき、ミルクを飲ませます。
――― 結婚したときのことを覚えていますか？
答 あまりはっきりとは。
――― 第1子誕生のことは？
答 16歳のときに初めての子どもが生まれました。

（5）夫を若くして亡くした女性

――― おいくつですか？
答 30歳です。
――― 家族の数は何人ですか？
答 たった4人です。夫が死んだので。3人の子どもがいます。
――― 御主人はどうして亡くなったのですか？
答 病気です。12年前でした。
――― あなたは何をして生活の糧をえているのですか？
答 農民です。1.5エーカーの土地を持っています。米を作っているのです。
――― 子どもの世話もしているのですね？
答 3人の子どもが学校に行っています。そのうち二人は寺院で学んでいます。寄宿舎に入っています。もう一人の娘はここで学んでいます。
――― 生活していくに十分ですか？
答 あまり。私ひとりが働いているのですから。助けてくれる人はいないので少し困難です。
――― 他の定期収入はないのですか？

答　田畑から得られるものだけが収入です。副収入はありません。ほんの少しチリを作っていますが、大した収入にはなりません。

――　他所の土地に行ったことがありますか？

答　ティンプーにチリを売りに行ったことがあります。

――　学校には通いましたか？

答　学校教育は受けていません。

――　子どもたちの将来についてどんなことを考えていますか？

答　私は子どもたちをできるだけたくさん教育を受けさせてやりたいと思っています。卒業後は、子どもたちが何をするのかは分かりません。土地を耕すかもしれませんし、公務員になって収入を得るかもしれません。子どもたちが成長したとき自分で決めるでしょう。

――　農業のあなたの仕事を継いで欲しいとは思いませんか？

答　子どもが教育を受けて、公務員になっても、その土地は誰かが世話をしていくだろうと考えています。そんなに大きな期待を持っているわけではありません。誰かが自分の土地の面倒をみなければなりませんが、おそらく子どもの誰かが面倒を見ることになるでしょう。

――　他に何か希望することは？

答　何も特にはありません。

――　一番幸せだったときと不幸せだったときは？

答　夫が生存中だったころです。夫の死後はあまり幸せなときはありませんでした。子育てのためにすべてのことをしなければなりませんから。子どもを学校に通わすために、制服その他の用意が必要ですし、やりくりは大変です。

――　お祈りはしますか？

答　ええ。毎朝。時には外の畑ですることもあります。子どもたちが健やかに育ってくれることを祈っています。

Ⅲ　ネパールにて

以下は、ネパールに在住するあるふたりのブータン難民の活動家とのインタヴューの記録である。1999年3月9日、ブータンからの帰途、ネパールの首都カトマンズのとあるホテルの一室で会見を行った。この会見はネパールで迎えてくれたリングホーファー氏の尽力に負うところが大きい。

ブータンは、多文化、多民族、多言語国家である。主要なエスニック集団だけでも、チベット起源を持ち、現在の政治的な（言語的にも）支配集団であるNgalongs(ンガロング)、東ブータンを拠点とするSarchops(サルチョップ)、中央ブータンを占めるKheng(ケン)、ネパール系で南住民のほとんどを占めるLhotshampas(ロチャンパ)を数える。ブータンにおける、近代化と開発をめぐる最近の紛争も、この民族的な対立が背景にあることは疑いない。

人口およそ60万人といわれる小国ブータンから追放されたネパール系ブータン人10万人近くがネパールその他に逃れ、その多くが難民キャンプで生活している。

ネパール系の人々が大衆的な示威を行ったのは、マシュウ・ジョセフによれば、近年3度あり、それらは、（ｉ）1969年のブータン国家評議会の結成とその失敗、(ii) 1985年のブータン国籍法に基づいた1988年国勢調査後のレジスタンス運動、(iii) ネパール系住民の強制的な追放と追放された人権集団の民主化の運動として大別されるという。（＊Mathew Joseph C. Ethnic Conflict in Bhutan, Nirala, New Delhi, 1999.）今回のわれわれの調査活動の範囲は、首都ティンプーとせいぜい中央ブータンまでに限定されていたため、彼らの主張の当否を確認するまでには至らなかった。だが、現実にブータンにかつて在住していた人々が国境を越えて生活することを余儀なくされているという事実、しかも、その割合が20パーセント近くを占めるという事実は、無視できない。本報告書の辻本論文やリングホーファー論文はそのことをよく伝えている。

インタビューの中で言及される国勢調査とは、政府の説明によれば、ネパール人移民の流入を阻止することを目的にしたものであったという。1985年の国籍法を基礎にしたこの調査は、土地税の納入の有無によってブータン国民を7つのカテゴリーに分類し、国外追放をも含めた厳しい調査であったといわれている。このとき国王にこの国勢調査に反対する請願を送った南ブータンの代表が逮捕されているが、今回のインタビューの主もこの事件の際に巻き込まれたものと思われる。

――― おそらく私の質問は大変素朴なものかもしれませんが、どうかお気を害さないでお答えいただけるとありがたいです。まず、差し支えない限りで、お名前とこれまでのお仕事及び現在の状況を教えてください。

R 私の名前は、R.G.と申します。私の職業は教師でした。ブータンで教えていました。
生物学の講師としてサムチSamti の教育研究所で働いていました。3年以上教えていたでしょうか。

――― あなたは教師であり、科学者なのですね。

R ええ、まあ、科学者というより、教師ですが。私はロンドン大学で生物学の修士号を取りました。その後、1986年から1989年まで同研究所で教え始めました。ブータンで教えている間、私は新しい政策について学びました。ブータン政府は1985年から1988年にかけて新しい政策を導入しました。そして私たちは思うのですが、この政策はその時代と合致したものではなかったのです。一般民衆のためになるというのではなかったように思います。この政策は再検討されるべきだったと思っています。そしてもし必要なら十分な検討を経た後に、実施すれば良かったのです。私たちがその政策に反対する活動を開始したとき、この国は非常に厳格なシステムを持つ国だったので、ブータン政府は不快感を顕わにしました。われわれもこの新しい政策に不快感を表明しました。そして彼らもわれわれの不快感にこたえるかのようにより抑圧的に振舞うことによって、不快感を表明しました。ここからです。問題が発生したのは。そういうことがなければ、あなたもご存知のように、人々も文化も、ブータン中のすべてのことがすばらしい国なのです。ブータンの民衆は非常に柔和で平和を愛好する人々なのです。東ブータン、西ブータン、南ブータンの間には、何の問題もなかったのです。宗教上の差異や伝統的な文化の差異以外には、兄弟や姉妹のように仲良く暮らしていたのです。もちろん、他の集団の文化や伝統を自ら進んで取りこもうとする開放的な性格をもあわせ持っています。こうして、東ブータンの人々は南ブータンの人々の伝統や文化を実践することが好きです。また、同じように南ブータンの人々は北ブータンや西ブータンの人々の伝統や文化を実践することに愛着を持っています。そこでは何の強制も働いていなかったのです。しかし、80年代の後半になって、ブータン政府は一連の政策を発表します。この政策こそが95,000人のブータン人がネパールにおいて難民として住みつかざるを得なくなった問題の発端なのです。私はあなたのご質問に非常に簡潔に答えたと信じます。

――― 難民の人口をもう一度教えてください。

R 95,000人です。それはブータン国民全体の16～17%にあたります。非常に高い割合です。

――― その当時、何があったのですか。そしてその政策はどうして出てきたのでしょう。

R ああ。その人々はどうして移住させられたのか、ということですか。もう一度、この政策について簡潔に言いましょう。実際、主要には二つの政策がありました。ひとつは1988年の国勢調査の政策です。そして二つ目は1989年の「一国家・一民族」の政策でした。前者の政策は、主要には南部の民衆の人口、すなわち、南部ブータンのネパール語を話す住民の数を減じるブータン政府の施策として、多くの人々からみなされていました。実施の仕方、企画の仕方、調査の修正の仕方、どれを取っても、政府の意図はできるだけネパール語を話す住民の人口を減らすことだったのです。この施策が実施されたとき……

――― すみません。それはこういうことですか。つまり、ネパール語を話す住民を国外に追い出そうとしたのですか。

R ええ。つまり、この政策の実施で、すでにブータン国民として認知されていた人々が、突然非ブータン人として宣告されてしまったというわけです。そして非ブータン人という口実で、ブータン政府は政府が国から追放したいときに追放するようになったのです。

――― 政府は住民がすべて仏教徒になることを望んでいたのでしょうか？イスラム教徒でもヒンズー教徒でもなくて。

R いいえ。ブータンには二つの主要な宗教があります。ひとつは，北の地域で盛んな仏教で、もうひとつはヒンズー教でこれは南の地域で多いのです。でも，イスラム教もキリスト教もありません。確かにキリスト教徒もいないわけではありませんが、そして恐らくイスラム教とも少数いると思われますが、ヒンズー教や仏教徒ほどの数ではありません。北部は圧倒的に仏教徒です。南部は

ヒンズー教徒が大半です。しかし問題は、宗教上の理由よりもブータン政府の目的は、南ブータンの人口を制限することだったのです。それがどの様に行われたかといいますと、法律上すでにブータン人であった南部のブータン人を減らそうとしたという苦い事実からも明らかです。これが問題の始まりでした。しかしこれは最初はそれほど大きな問題と思われていたわけではありません。おそらく何らかの理由で実施は先延ばしにされていました。おそらく1980年、1988年後半までは。それから後は強制的な実施が始まりました。1989年には、「一国家・一民族」の政策が始まったのです。二つの事柄が一緒に合わさってより困難になってさえいきました。第一の政策は南ブータン人のみに関わっていましたが、第二の政策は国民すべてに関わるものでした。それはあらゆるブータン人にひとつの文化、ひとつの実践、ひとつの伝統を守らせ、ひとつの言語を話させるように強制したのです。そして宗教はある特定の場所では強制されましたが、全国的に強制されることはありませんでした。文化、伝統、言語は全国的に強制されたのです。

——— 1989年にこの政策は開始されたのですね。

R　ええ。そうです。法制化されたのです。国民服を着なければ、Jigla Manja　を実践しなければ、困ったことになるぞ、と脅されたのです。

——— 宗教界からの圧力というのは、あったのでしょうか。

R　ある面ではイエスですし、ある面ではノーです。私が思うに、その強制は政府のシステムの基礎をなしているのではないでしょうか。私の意見はこうです。そのような強制は、しばしばブータン政府が言うように、その国のユニークさを示すことには必ずしもならないと思います。彼らは世界に向けてこういう風に言っています。「われわれはユニークな伝統や文化を保存しようとしているだけなのだ。」しかし、それはすでに保存されていますし、人々はこの伝統や文化の保存を強制とだんだん強く感じるようになってきていました。「これをしなさい、あれをしてはいけない」と、法で強制する必要は何もなかったのです。問題が始まったところなのです。そこで、多くの人々は政府は圧制的になってきていると感じたと思います。その当時は、政府は民衆と打ち解けた関係になるべきときだったのです。世界はそのような仕方で変わりつつありました。私は、わがブータン民衆は非常にゆっくりとした政府の変化を希望していたと思います。それはUターンだったのです、突然の。事態は1988年、1989年まではよい方向に行っていました。それが突然Uターンになったのです。そのためにたくさんの混乱、たくさんの敵意を引き起こしました。そこで私たちは、私たち自身の根本的な要求である、基本的な自由が奪われてはならないことを言ったのです。この問題は南ブータン人だけの問題ではありません、ブータンの他の地域の人々——　東ブータン、北ブータンの人々——にかかわる問題です。人々は自分の本当の感情を表せない、心を開いて語れないのです。でも、人々は内心では幸せではないのです。政府にいる人々、当局、すなわち権力を持っている人々は幸せでないわけがありません。というのは、自由以外の必要な物事のほとんどを彼らは持っているからです。しかし、多くの人々は、権力者が持っているもの　——富、経済、権力を持っているわけではありません。さらに言えば、彼らはいかなる自由を持っていません。それで、東ブータン、南ブータンの人々は、強度に恐怖の生活を送っています。彼らは、今でさえ言いたいことを言えない生活を送っているのです。

——— その当時、あなたは何をしていましたか？

R　一個人として、私はサムティで講師として教鞭を執っていました。検閲政策が行われていた1988年から1989年頃、政府がその当時やっていることは、その国の未来のためにならないかもしれないということを政府に進言することを考えていました。というのは、ブータンは国連の加盟国でしたし、他の国際機関の加盟国でもありましたので、民衆の意思を尊重することが期待されていましたから。しかし、民衆の意思を尊重するどころか，その意思を抑圧する暴挙に出ました。ブータンの民衆は平和に暮らすことを望んでいたにもかかわらず、です。ブータンの人々は世界で最も平和的で、最も繁栄する国として生きることを望んでいました。私は、そう思ったひとりです。政府が国民服を着るように私に強制していなかったときですら、私は自分の意思で国民服を着ていま

した。というのも、私は自分の国が好きだったからです。私は自分の政府を尊敬していました。四年間私がイギリスに留学した時には,「ゴ」を着ていきました。私は「ゴ」に誇りを持っていました。それは私の国民服だったからです。ネパール語を話す国民すら、私と同世代の者は、喜んで「ゴ」を着ていました。しかし,強制されたときには非常に事態は困難になります。政府は言いました。「もし『ゴ』を着けなければ、刑務所行きだ。これを着ければ問題はない。」と。そしてその法は、非常に不幸なことですが、ハイクラスの人々に適用するためではありませんでした。たとえ,私が国民服を着なかったとしても、誰も何も言いませんでした。警察も私に何も言いませんでした。しかし、地方に行くと村人たちが「ゴ」を着けなければ、逮捕されてしまうのです。警察に連れていかれるのです。「ゴ」を買うお金のない、都会にやってきた貧しい人々はそれを着ないために刑務所入りになりました。このような発展は、思うに、必要ではありませんでした。私は何かをしなければという良心に駆られました。

――― 私は国民服を着用していない民衆を見ましたが、それについてはどのように説明されますか？それほど多くはなかったと記憶していますが、とりわけ、子どもたちの中にはそのような子どもが多かったように思いますが... これは不法行為ですか？

R ええ,確かに。

――― 法に反した行為だと。

R 確かに、法に反していると考えられます。1989年5月の時点で、私が屋外で、家の中で街中で、ありとあらゆるところで、国民服を着けていなかった場合、それは不法行為です。国民服を着けていなくては行けないのです。

――― しかし、着なかったからと言って、今日逮捕されるということはないのでは？

R 今日ですって？今でもあるところでは、厳密に適用されている地域があります。でも、聞くところによれば、厳密に適用されていない地域もあるようです。しかし、その当時これが問題だと彼らが気がついていたら、彼らは最初に強制するべきではなかったのです。もし私が今日ブータンにいて、Tーシャツを着て街に出かけていっても、私が逮捕されることはないかもしれません。しかし、貧しい人々に対してなら、逮捕したり、刑務所に入れたりすることでしょう。法と規則はすべての人々に等しく適用されねばなりません。そしてそれが適切で、必要性があり、その国にとって良いものであれば、法と規則は、実施されてしかるべきであると思います。けれども、今回の場合はそうではないのです。「一国・一民族」政策は、私の意見では、良き意図でなされたのではないと思っています。その意図はすでに民衆の結集に役立ったのです。ブータン政府が民衆を抑圧下に置こうと決めた理由はいろいろありますが、主な理由は二つです。1988年の国勢調査政策、すなわち「一国・一民族」政策は、南の国境地帯に軍隊を集結させ、学校を閉鎖し、病院を閉鎖しました。南ブータンに行けば、今なお多くの学校が閉鎖されていることがわかるでしょう。

――― どうして学校まで閉鎖されたのですか？

R ええ。ブータン政府は、学校閉鎖の理由として「モロヴ」の脅威を挙げています。テロリストはモロヴとして、反民族主義者として知られています。これが政府の挙げる理由です。1990年には、いくつかの学校が反民族主義者によって破壊されたとするブータン政府の主張や説明がありますが、私には確認のしようがありません。なぜなら、そのころ私は入獄されていましたし、私自身でその真偽を確かめることはできませんでした。それが政府の挙げた理由ですが、しかしその理由は、民衆に社会的サービスを保証することは、政府の義務だと思うのです。それをしないで、あらゆる学校を閉鎖してしまったのです。そして今、すべてを反民族主義者のせいにして学校を閉鎖したままにする口実に使われています。そして今、1991年、今から8年前ですが、南ブータンの子どもたちの多くは8年間の学校に通えなくなってしまいました。病院がないために、適切な基礎的健康の世話を受けることのできなかった南ブータンの多くの人々がいます。1992年から1993年にかけていくつかの学校が開校されました。しかし私はこれらの学校の多くは普通の人々のためではなく、政府が保護する人々のためなのです。そして基礎的な保健の制度は、保護されている人々の家族に結びついています。今、昨年からですが、学校や病院が続々開設されています。ブータン政府は北部ブータン、タシガンその他の地域から、民衆を

移住させ始めています。人々は、聞くところによると、南ブータンに行って難民の残した土地に移住するように言われているようです。このことについて何かあなたは知っていますか？再定住プログラムです。

——— ある男性が私に、いずれ農場に帰るつもりだ、と言うのを聞いたことがあります。というのも、政府が彼に田地をくれるというチャンスをつかんだからです。これはおそらくあなたの言ったことと関係しているのでしょうか？

R すでにそのことは行われています。ブータンの私の土地のように、高いランクの人々の土地は必ずしも、触れないできました。しかし、難民キャンプにいる、村の人々の土地は取り上げられてしまいました。1991年と1992年以来、この土地の持ち主は不在になっています。今、この土地は北ブータン人、タシガンからの人々、に与えられています。この政策によって、政府は学校を開校し、病院を開設し始めているのです。学校の閉鎖、病院の閉鎖は、南ブータン人にプレッシャーを与えることでした。これはブータン政府の側の大きな不正です。

——— これがあなたの言う理由ですか？

R ええ、これが1989年以来どうして私が関わるようになったかの理由です。それから、われわれはブータン国王に向けてアピールをし、民衆の自覚のための小さな小さなパンフレットを作成しました。われわれがブータンでそれをしたとき、国王、国家、政府に反したものを言うとき、それは反逆罪に問われます。ブータンでは、反逆罪は死刑に値するのです。政府の政策に反対しさえすれば反逆罪を構成することになってしまうのですが、そのとき、「反民族主義者」とレッテルを貼られてしまいます。そしてすべての反民族主義者は、反逆罪に問われ、反逆罪の罰は死刑なのです。今でさえ、国家安全保障法はそのような条項を変えていません。私は何人かのメンバーとともに、国王へのアピール状やパンフレット作成を行った廉で反逆罪に問われ、私は逮捕され、入獄を余儀なくされました。

——— 逮捕ですか？

R ええ。二年以上監獄に入らされていました。私を監獄から出られたのは、ここにいる彼のような友人と世界中の人々のおかげです。私はアムネスティインターナショナルの「良心の囚人」及び日本とドイツのグループが私を救出してくれたのです。

——— あなたの状況は外部の人たちにどの様にして知らされ、具体的に救出のためのどの様な行為がなされたのですか？

R ロンドンのアムネスティインターナショナルがブータンに関する調査を行っていたのです。私が収監されていることを彼らが知って、調査がなされ、私が収監に値する何の罪も犯していないことが分かったのです。それでアムネスティは日本のグループやドイツのグループにそのことを知らせ、私の解放のためにブータン政府に手紙を書くなど骨を折ってくれたのです。

政府は私に収監生活を与えました。逮捕されて一ヶ月、ブータンは私に死刑を宣告しました。私の国では、死刑は銃殺を意味します。しかし、アムネスティインターナショナルや世界の人々は、なぜ私が投獄されたのかを知っていました。そして彼らはブータン政府に圧力を加え始めました。そこで政府は、非公式ですが、私を死刑から終身刑に処分を変えました。彼らは決して私を裁判所に出頭させてはくれませんでした。しかし、この終身刑は、国際的な圧力のゆえに再び二年半の懲役に減刑されました。このようにして、私は解放されたのです。出所後民衆のために可能なことをするのが私の務めだと思うようになりました。そこで私は、政府代表者と話し合いをしようとしました。しかしそれは大変困難で、新しい政策を実施することだけを考えており、抑圧を止める意図がないことを知りました。そのため私はますます活動的になり、私の生命は脅威にさらされ始めました。私の家族や多くの友人は、私がこれ以上この国にとどまって、活動を続けると、私の身はますます危険にさらされる、と考えました。そこで私の家族や友人は故国を去るように私に強く勧めました。私はどうすべきだったのでしょうか？せいぜいネパールに来て、民衆のために私の出来る限りのことをすることでした。これが今まで私のしたことですし、今していることです。ブータンに正義をもたらすために、世界中の人々が支援と連帯の手を差し伸べてくれています。ブータンで働く多くのボランティアたちはブータン国王や大臣に手紙を書いています。過去8年の間に起きた

事件が決して正しいものではないこと、この状況を変えねばならないこと、そしてそれは積極的な方法で変えねばならないことを伝える内容のものでした。私は難民キャンプでいる人々はキャンプにとどまるべきでない人々だと思っています。彼らは許されるべきですし、ブータンに愛着を持っています。家庭に帰るべきであって、キャンプにいるべきではないのです。その人たちは農民で、非常に自立した人々です。彼らは、恐ろしく貧しい人々、あえて言えば例えば、インドやバングラデシュのような人々ではありません。彼らはすべて何の問題のない人なのです。私は彼らが非常に豊かだと言いいたいのではありませんが、人々の多くは非常に自立しているのです。彼らは自分の土地を持ち，自分の食物を育て，それを食べてきたのです。彼らは外部の力にそれほど依存しているわけではありません。しかし難民のキャンプでは常に誰かに頼らないといけないのです。このような依存は、故国に、自分の土地に、自分の家に，帰ることを許されれば、解決されることでしょう。そのときこそ、私はある種の正義が実現されると思っています。これは、ブータン政府が即刻しなければならないことだと思います。これが私の意見です。私は彼らの努力に関して，何らかの政治的な変化をしてくれることを必ずしも求めているわけではありません。私はただブータン政府に「市民を故国に呼び戻す」ことだけを要求しているのです。これらの人々は何世代もブータンに住んでいました。ある者は九世代から十世代にわたってブータンで生活してきました。そしてブータン政府は新しい政策のために、彼らの強い信念に根ざしたこれらの人々を認めようとはしないのです。

――― ブータン政府とあなた方との間に何らかの対話のチャンネルはあるのでしょうか？

R いいえ。全くありません。私は現在の外務大臣，政府の議長と何らかの話し合いを持とうと試みてきました。彼は昨年まで外国で大使も勤めたことがあり、現在内閣官房の議長を勤めています。私は彼とジュネーヴで45分間おしゃべりをしました。それ以外は何のつながりもありません。もし、ブータンのグループ、ブータンの代表者のグループが話し合いに応じるための何らかのつながりをつくってくれれば大変有益だろうと思います。ブータン政府とネパール政府との間には対話があります。しかし、それは政治的なレベルで事態はそれほど好転する兆しを見せているわけではありません。より深刻になっているところもあります。

――― あなた方の組織とネパール政府との関係はどうでしょうか？良好な関係ですか？

R ええ、ネパール政府との積極的な関係はありませんが、悪い関係ではありません。われわれが必要なときには彼らのほうに話しに行きますし、彼らが必要なときにはわれわれのところに話しに来ます。しかし、恒常的なシステムとしての関係を作っている訳ではありません。ネパール政府がそのようなものを作ることを望んでいないのです。

――― （もう１人のブータン人に向かって）あなたはどうですか？何かコメントがありますか？

J 私の友がすでにブータン国内の状況とネパール国内の状況を明快に説明してくれました。彼はすべてを説明してくれましたし、何かあなたのほうで質問があればお答えしますが。

R 彼について少し説明させてください。ジャガタはカトマンズに住んでジャパJahpa（ネパールの難民キャンプの所在地）でわれわれの仕事を代弁してくれています。ジャパでしているどんな任務もわれわれがカトマンズで援助が必要な場合、ジャガタはそれをしてくれます。というのも、カトマンズにわれわれが来るときは限られていますし、情報を集めジャパに送る仕事を担う彼の責任は重大ですし、それを良くやってくれています。

J 私はここカトマンズでわれわれの組織の代表として働いています。たいてい当地のマスコミ関係者、政府、国連と共に働いています。私のしていることは基本的には情報サービスのようなものです。ネパール国外のあらゆる支援グループのために……、そして彼らからえたどんな情報でも、私はジャパに送り届けます。国外から来られる人々に私が会い、現在の状況を説明します。これが私がここで基本的にやっていることです。私が今やっていることは大した事をしているわけではありません。私は、もっと勉強しなければならないと思っています。なぜなら、わたしはブータンにいる間、勉強の機会が得られなかったので修士号を取得することができませんでした。いまここ

ネパールの大学で学んでいます。

――― ご専門は何ですか。

J 管理経営のマスターコースです。一年目を終えたところで二年目に入っています。５～６ヶ月後には終了するつもりです。

――― いろいろお聞かせいただき本当にありがとうございました。ブータンでは得られないたくさんの情報を得ることができました。大変うれしく思っています。

R こちらこそありがとう。私たちのほうこそ、あなた方と意見と交わすことのできることは大変うれしいことです。私は今日の話し合いがきっと将来のブータンでのお仕事を助けることになるでしょうし、今後の事態がどの様に進むべきかについてあなた方の考えにお役に立てることを希望します。

――― 確かにそうですね。私は自分ができることをしたいと思っています。ところで皆さんのほうから私たちに何か望むことはありませんか？

R 難民が自分たちの国、ブータンに帰郷するには多くの時間がかかると思います。それで第一のことは、おそらく人によっては意見が違うかもしれませんが、私の強い希望は難民キャンプにいる人々はそこに長くとどまってはいけない人々であるということを、ブータン政府に納得してもらいたいということなのです。彼らは故国に帰るべきですし、わたしはあらゆる人々にこの点、すなわち、威厳と誇りを持ってできるだけ早く帰郷してもらえるよう、働きかけたいのです。彼らは、世界の他の地域の人々と同じように普通の人間として生活できなければなりません。彼らは難民キャンプで生活してはならないのです。故国に帰るべきなのです。これが私が考えるところですし、いかなる個人、いかなる政府、いかなる組織もこの点で創造的、かつ積極的な役割を果たすことができると思っています。その点で日本政府は、国際的なコミュニティーで鍵を握る政府のひとつだと思っています。この問題で変化を与えることができるのです。ブータン政府は自分たちの偏見のある非合理的な見解を難民に押し付けるべきではありません。政府はもっと理性的になって、現在のみならず、未来について考えるべきです。そのためには時間がかかります。その国の善のために、その国の良き未来のために、この問題はできるだけ早急に解決されなくてはなりません。これがもし進行中の事態だとしますと、それはこの国の未来に対するインパクトを必ず持つことでしょう。難民という事態は起こってはならない事態であり、現体制の人々は、その責任は現在にはなく、次の来るべき五十年、百年のためであると言うことができます。